

# 医心 伝心

## 男女共同参画委員会から

県医副会長 村上 美也子

県医師会理事に就任してから、男女共同参画にかかわるようになりました。大学を卒業して30年経ち、その間大学病院、基幹病院、慢性疾患中心の病院で勤務し現在は開業医ですが、そのいずれの時代も良き理解者である上司や同僚に恵まれ、仕事を継続できたことは幸せなことでした。先日、思いがけないところで約20年ぶりに患者さんのお母さんとお会いしました。「先生がクーハンぶらさげて歩いていた姿覚えています」とか「よく入院していた〇〇ちゃん（息子のこと）は、いくつになられたのですか？」など懐かしい話に花が咲きました。また、当時の患者さんがお母さんになって自分の子どもを連れて、クリニックを受診されることもあります。「立派なお母さんになったよね、しょっちゅう泣いていたのに」と言うと、「先生こそ。点滴失敗しないかいつもみんなと心配していた」「先生『家の中はお化け屋敷、庭はジャングル』って言ってたよね」と返されました（今もあまり変わらないような…）。入院付き添い中のお母さんたちや子どもたちにも見守られ助けられて、小児科医を続けることができました。今は多くの人に助けてもらった分を、これからの若い人たちに返していきたい、何かできないかと試行錯誤の毎日です。

仕事と生活の両立に悩む医師が大勢います。男女共同参画を考えるには教育、労働環境の改善、社会環境の整備など様々な視点からのアプローチが必要です。今年度富山県医師会では早期からの

意識付けを目指し、富山大学4年生への男女共同参画に関する講義を行いました。種部恭子常任理事による講義の題名は「医師のワーク・ライフ・バランス～あなたはどのような働き方をしますか？家庭は持ちたいですか？～」でした。内容は医療安全、医療の仕組み、ワーク・ライフ・バランスなどについてです。今回の講義は実際一番聞いてほしい男子学生が多く聴講しており、自分たちの問題として考えてもらうことができました。講義の際にアンケートを行ったところ、「両立に重要なもの」として、女子学生では1. 職場の上司や同僚の理解、2. 多様な就業条件、3. パートナーの家事育児協力があがりました。「勤務したい病院」に対し男女共に最も多かったのは1. 診療内容の特性特徴、やりがい、2. 良い指導医がいるに続き、3. オンオフがはっきりしているという項目でした。日本医師会が若手医師に対して行ったアンケートでも「オンオフがはっきりしている」という項目は多くの支持を集めており、男性医師もワークライフバランスを十分認識した働き方を求めていることが明らかになっています。平成26年2月9日には富山県医師会主催で「ワークライフバランスで病院組織を変える～女性医師4割時代の人材獲得戦略～」「病院勤務環境について」という内容で講演会が行われます。富山県に学生がたくさん残り男性医師・女性医師共に生き生きと働けるような勤務環境に向けて、多くの先生にご出席いただければと思います。